

HIVI

ハイヴィー—AUDIOMAGAZINE 2015

11



衝撃のUHDブルーレイ初号機登場！
パナソニックDMR-UBZ1の全貌

秋の新製品第二陣

東芝4KテレビZ20X
シャープ4KネクスT
B&W新800シリーズほか

厳選30機種を辛口採点！
音のいいヘッドフォンはコレだ

温かく柔らかな肉質感が漂う
優雅で上品なサウンドだ

高津修

Review

2



INTEGRATED AMPLIFIER

Creek Audio Evolution 100A

¥370,000+税

●定格出力：110W×2(8Ω、2ch駆動、1%THD) ●接続端子：アナログ音声入力5系統(RCA [1系統はXLR切替え式]) 他 ●消費電力：最大500W ●寸法/質量：W430×H60×D280mm/9kg ●問合せ先：ハイ・ファイ・ジャパン ☎03(3288)5231

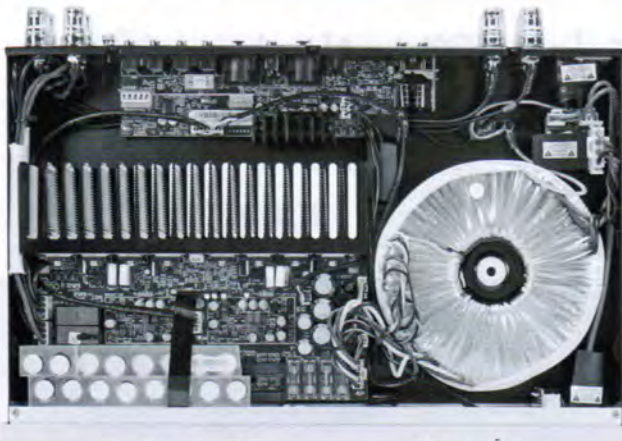
英国発の新着プリメインアンプ。同国のアンプには、たとえば米国流儀の物量で攻めるハイエンド機よりかなり規模が小さい、ドメスティック志向の好製品が多いわけだが、クリークも典型的なその仲間である。Evolution 100Aは、定格出力110W×2(8Ω負荷)で、フットを含む背丈が60mmのスリムサイズ。とはいえ内容はたつぷりマニアックに凝ったものだ。基本的に簡潔なラインレベル入力のアナログ増幅機なのだが、バランス入力端子も備え、またオプシオンのフォノボードをつかえばMMあるいはMC対応のイコライザーアンプ機能が加わる。さらに、これもオプションでFM/AMチューナー・モジュールや、D/Aコンバーターおよびブルートウース対応モジュールなども用意される。

いっぽう、ファンクション制御はすべてデジタルコントロールで、メニュー設定により入力端子の一部をパワーアンプ部に直結してバイアンプ駆動に転用したり、AVシステムに組み入れたりすることもできるといった、さまざまな仕掛けもっている。通常バイパスされているトーンコントロール回路を生かすのも自由である。付属の赤外線リモコンは、CDプレー

Topics & Reviews

audio
components

パワーアンプダイレクト入力にも対応した
コンパクトサイズのプリメインアンプ



←本機に最適化したというG級増幅方式。360Wの大容量のトロイダルコアトランスを搭載し、電源部を強化。パワー部、プリ部、デジタル回路用に別の巻線を用いた相互干渉をおさえるレイアウトは50Aと同様

イヤール等と共通のシステムリモコン。本体パネルのファンクションディスプレイは有機ELした。

パワーアンプ部には、クラスGというめずらしい動作方式を採用している。これはアナログ増幅だが、入力レベルに応じて出力ステージの電源電圧を自動的に切換えるしくみ。小信号時には必要のない高電圧をカットすることで、電力消費のムダを極力なくそうというものだ。近年、ポータブルオーディオ機器のバッテリー寿命を延ばす目的でよくつかわれているが、当機は小信号入力の低電圧動作時に十分な電流を流しておき(歪みを減らす)、高電圧に切り替った時だけ別のパワーデバイスを起動する(発熱を最小限にとどめる)という考えかたで高音質を確保。同時にいっそう大きなパワーを得ている。短時間の動作なら過熱しにくいムリが効く、というわけだ。実際、天板に触ってみるとスイッチング電源のデジタルアンプかと錯覚す

るほど熱くならないアンプである。電源トランスには高効率なトロイダルトランスをつかい、アナログ系とデジタル系の給電巻線を分けている。



↑本機は、プリアンプ部をバイパスするパワーアンプダイレクト入力に対応している。また、追加モジュール用の空きスロットが設けられ、機能の拡張も可能。96kHz/24ビットまでの信号に対応するUSB入力を備えたRUBYDAC(¥97,000+税)、AM/FMチューナーのAMBIT TUNER(¥29,000+税)が別売にて用意され、フォノイコライザー機能の追加は基板にフォノカードを差し込む方式でMM対応のSequel MM(40dB: ¥28,000+税/48dB: ¥35,000+税)とMC対応のSequel MC(54dB: ¥35,000+税)を用意する

ヘッドフォンの専用アンプを内蔵したことも、用途によっては見逃せない特徴だ。一般的なプリメインアンプ(AVセンター)では、単純にスピーカー出力を分圧してヘッドフォンを駆動することが多いのだが、それは厳密なマッチングを考えたものではないので、いわばおまけ機能になる。今はハイレゾ時代なのだからそれではいけない。ヘッドフォンにも良質な信号を供給して、きっちり駆動しよう、というわけだろう。アンプ回路が独立しているため、設定によってスピーカーと同時にヘッドフォンを使用することも可能だ。

これは聴きものである。同社のCDプレーヤーEvolution 500CDを組合せ、ハーヴェイ・メイソンの難物ソース「カメレオン」を聴くと、重低音の腰が坐ってバスタブのスキンの振動感もリアル。そして、サクスの艶やかな厚みが気持ちよく出てくる。ジェイムス・テイラー「ピフォア・デイス・ワールド」のヴォーカルは、あ、これがプリティッシュサウンドの味かなと嬉しくなるにちがいない温かく柔かな肉質感が漂って、ほどよく優雅で上品だ。ただしウェットな陰りを訴求する方向でなく、音色表現は明るい。そこが今様と聞こえるし、クリークの意図だともいえるだろう。バランス接続にすると、アンバランスに比べすこし硬くなる代りに元気のよさが増してくる。たぶん変換回路が入ると思われる。

結果としてEvolution 100Aは、トラディショナルな英国流儀のアンプにはあまり見かけなかった重装備モデルになっている。マスターボリュームの操作感など、こまかい仕上げも素晴らしい。価格もそれなりのマニア水準ではあるけれど。

プレーヤーをバイオニアのBD PILLX88に代えて、BDエアチエックの「エリック・クラプトンライブ・イン・ジャパン」を視聴。2チャンネル収録だが、見事にサウンドの雰囲気が出た。AVセンターではなかなかむずかしい、純オーディオアンプの底力である。ヴォーカルはよくもわるくもちよつと渋く、年齢が増したようになった。

明るい音色表現 艶やかな厚みが気持ちよい

さて、そのパフォーマンスだが、

Creek

Evolution Series

最近の低いインピーダンスのスピーカーを、ドライブする事が出来る、高い電流供給能力を持つ、新しいハイボア型パワー部備えた、プリメインアンプ。



EVOLUTION 50CD DAC/CD Player ¥189,000

■デジタル入力: 2 x SPDIF/24bit192kHz, 2 x Toslink/24bit192 kHz, 1 x USB/24bit 96kHz ■DAC: 24bit192kHz 2 x Wolfson WM8742 ■重量: 5.5Kg ■サイズ: W430 x H60 x D280mm



EVOLUTION 50A Integrated Amplifier ¥167,000

■出力: 55W/8Ω/2ch, 85W/4Ω/2ch ■最大供給電流: ±26A/1Ω, 50mA ■消費電力: 最大 350W, 待機 10W ■重量: 7.5Kg ■寸法: W430 x H60 x D280mm



EVOLUTION 100A Integrated Amplifier ¥370,000

■出力: 110W/8Ω/2ch, 170W/4Ω/2ch ■最大供給電流: ±26A/0.5Ω, 50mA ■消費電力: 最大 500W, 待機 20W ■重量: 9Kg ■寸法: W430 x H60 x D280mm

OBH Series

ローコスト・ハイパフォーマンスで、必要な機能を、手軽に提供する、OBHシリーズ。



OBH-15mk2 Phone Pre-Amplifier ¥69,000

■利得: MM/40, 60dB MC/60, 70, 80dB ■重量: 1.5Kg ■寸法: W100 x H63 x D150mm/本体 ■仕上げ: Silver or Black (特注)



OBH-11 Headphone Amplifier ¥31,000(Black)

■出力: 10 mW ■対応インピーダンス: 30Ω - 300Ω ■重量: 360g/本体 ■寸法: W130 x H65 x D100mm/本体



OBH-21mk2 Headphone Amplifier ¥75,000

■出力: 100mW/8Ω, 160mW/16Ω etc ■対応インピーダンス: 8 - 1kΩ ■重量: 630g/本体 ■寸法: W180 x H60 x D95mm/本体 ■仕上げ: Silver or Black (特注)

creekaudio.com / hifijapan.co.jp

1

パネルの iPod / USB 端子へ挿し込んで聴いた音がよかった。老いぼれの耳にあんまり高い音は届かない。ローレゾなのは事実だけれど……。

とはいえ、192kHz / 24ビットや DSD28MHz (当機で扱えるのはここまで) でいていかにデジタル化された古い音源が、なるほど見ちがえるような鮮度で眼前によみがえることもまた事実なのだからおもしろい。どちらにせよ、この水準なら CD プレーヤーで音楽を聴かないひとが増えてきてても不思議ではないと納得した。

響きが劇的に豊かになる 5:1:4のアトモス再生

AV サラウンドについては、主にドルビーアトモスと在来フォーマットの聴き比べを行なった。映画「ゼロ・グラビティ」のアトモス盤と DTS-HDMA 盤

を使うという単純な方法だ。おそらく小型のマイクを貼り付けて録ったと思われる骨伝導トーンにもう少し生々しさが欲しい。そう聴こえるのはどちらのディスクでも同じ。ウーファー帯域に今ひとつ締めよりの足りないところがあるせいだが、そこはスピーカーセッティングにもよるだろう。時間をかけて追い込むべきチューニングのポイントがそのことだ。

音場展開の密度感やせわしなく移動する音像の軌跡表現は、理屈どおりにアトモスが優勢。しかし、予想したほどの差ではないともいえる。スピーカー構成は、いちばん基本的な 5:1:2。試しに、外部アンプと天井スピーカーを増設し、5:1:4 システムにしてみた。すると、アトモスの空間がボンと広がり、響きも豊かになって、この差がむしろ劇的に大きい。それは天井スピーカーの能力によ

りけりだとしても、5:1:2 再生に習熟したら 5:1:4 にチャレンジする価値は充分ありそうだ。ただ、むやみにチャンネル数を増やせばよいというものでもないことはもちろんだ。「アメリカン・スナイパー」のアトモス再生では、トップフロントが被ってきて窮屈な感じになるシーンもあり。サラウンド再生術の行く手は、かくして果てしな

- リファレンス機器
 - プロジェクター: ソニー VPL-VW1100ES
 - スクリーン: オーエス ビュアマットⅢ Cinema (120インチ/16:9)
 - BDプレーヤー: パイオニアBDP-LX88
 - スピーカーシステム: フォステクスGX103MA (L/R), GX102MA (C/LS/RS), ケンブリッジオーディオMin22x2ペア (トップスピーカー)
 - サブウーファー: イクリプスTD725SWMK2
 - パワーアンプ: デノンPOA-T3
- 再生したソフト
 - CD
 - 「ビフォア・ディス・ワールド/ジェイムス・テイラー」(コンコード)、
 - 「No Sun In Venice/The Modern Jazz Quartet」(アトランティック)、
 - 「風のリボン/トワ・エ・モワ」(ユニバーサル)、
 - 「カメレオン/ハーヴィー・メイソン」(サバイ)
 - SACD
 - 「モーツァルト: ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲/五嶋みどり、今井信子、ほか」(ソニー・クラシカル)
 - デジタルファイル
 - 「Taking a Chance on Love/ジェーン・モンハイト」(ソニー、CDリッピング44.1kHz/16ビット/FLAC)、
 - 「ワルツ・フォー・デビル/ビル・エバンス」(リヴァーサイド、192kHz/24ビット/FLAC)、
 - 「ベーターヴェン: 交響曲第9番/マイケル・ティルソン・トーマス指揮 サンフランシスコ交響楽団」(SFS、96kHz/24ビット/FLAC)、
 - 「ガウチョ/ステリー・ダン」(ワーナー 192kHz/24ビット/FLAC)、
 - 「Air Mail Special / 角田郁雄ビッグ・バンド」(DiGiFi 14号付録、192kHz/24ビット/WAV、2.8MHz/1ビット/DSD)
 - BD-ROM
 - 「空軍大戦略」(FOX)「ゼロ・グラビティ」(アメリカン・スナイパー) (ワーナー)
 - 「ネイチャー」(NBCユニバーサル)、「トランセンデンス」(ボニーキャニオン)